

和洋館並列型住宅の誕生と その後の住まいの変化

内田 青蔵 Uchida Seizo 神奈川大学工学部建築学科教授

専門は、近代日本住宅史。著書に「間取り」で楽しむ住宅読本（光文社、2005年）、『新版 図説・近代日本住宅史』（共著、鹿島出版会、2008年）、『日本の近代住宅』（鹿島出版会、2016年）など。神奈川大学日本常民文化研究所長。日本生活学会会長。



明治時代になると、欧米のさまざまな技術やモノ、さらには知識などが導入され、生活の基盤となる住まいも大きく変化し始めました。現在でも、私たちが生活を指す“衣・食・住”という言葉がありますが、この序列は三領域の変化のしやすさを示しているのではと思えるほど、住まいの変化には長い時間が必要です。経済的な負担を考えても、住まいは古い衣服を脱ぎ捨てるように簡単には替えられないからです。ただ、江戸から明治へという社会変革は、そんな常識的な変化とは異なり、衣・食も含め“住”の短時間での劇的な変化を促したように思います。しかもその変化は、姿かたちの変化はもとより、ユカ座からイス座へ、接客本位から家族本位へ、さらには、住まいの商品化といった動きをももたらしたのです。

ともあれ、住まいの変化には経済力も必要で、上流層の人々から始まり、やがて、中流層の人々へと広く浸透していくこととなります。この3回の連載では、洋風化の動きを牽引した上流層から中流層の人々の住まいに焦点を絞り、住まいの変化と人々の暮らしびりをみていきます。1回目は、住宅の洋風化の始まりとしての「洋館」の住まいへの導入のようすを紹介します。

天皇の洋装化と行幸

開国以来、居留地には外国人が住み始め、伝

統的住まいとは異なる洋風の形式も知られるようになっていました。ただ、そうした形式が日本人の住まいに採り入れられていくのはもう少し後のことでした。

“富国強兵・殖産興業”をめざした明治政府は、欧米社会の文物の導入を積極的に行い、その一環として明治5年（1872年）に新制服を発布し、旧来の礼服は洋服に替わりました*1。新時代のリーダーである明治天皇も洋装に変わり、また、明治6年（1873年）には断髪もされました。そして、明治5年以来、洋装の姿で行事はもとより全国巡幸に向かわれたのです。

一方、明治天皇は臣下への行幸も頻繁に行いました。臣下への最初の行幸は、明治4年（1871年）で、以後明治6年（1873年）に6カ所、明治8年（1875年）に7カ所、と続けられています。

ところで、洋装を採り入れた明治天皇は、巡幸の際に利用する行在所では、建物が伝統的な和館であっても靴を履いたまま室内に上がり、持参したイスとテーブルを置いてイス座の生活を行っていました。そのため、行幸の機会の榮譽を得た臣下の間では、洋装の天皇を迎える場として、新たに行幸用に“洋館”を構えるという動きも起こることになるのです。

*1 ウェブ版「国民生活」2018年2月号「明治時代の生活に学ぶ」第3回参考 http://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-201802_10.pdf

平成30年（2018年）は、明治元年（1868年）から起算して満150年に当たることから、政府では、「明治150年」関連施策を推進しています。その一環として本誌では、明治時代を生きた人々の暮らしを振り返り、現代の暮らしを展望します。 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/>

洋装にふさわしい洋館の出現 —和洋館並列型住宅の誕生

明治8年(1875年)1月、明治天皇は従四位の黒田長知邸に行幸されています。その時のようすを『明治天皇紀』には以下のように紹介されています。

「同邸は洋館にして客歳新に之れを築く、当時洋式建築の壮麗なるものは甚だ稀にして、一二の公衛及び外国公使館等に過ぎざりきと云ふ、・・・」『明治天皇紀 第三』(吉川弘文館、1969年、392ページ)

当時、美しい洋館は珍しいものでしたが、黒田氏は行幸時の前年に洋館を建てました。その目的は、自らの住まいのためというよりは、洋装の天皇のために、イス座の洋館を建ててお迎えしたと考えるべきでしょう。いずれにせよ、天皇が使用された洋館は、黒田家が天皇をお迎えしたことを示すステータスシンボルとなったのです。

この黒田邸以降、行幸用に洋館を建てる事例が増えていくことになります。やがて、和館の横に洋館を構える形式—和洋館並列型住宅—は、行幸の有無とは関係なく流行し、新時代の上流層の住宅形式として定着していくことになるのです。

『金色夜叉』にみる住まいの様相

当時の上流層の住まいのようすを当時の小説からみてみましょう。明治の文豪尾崎紅葉の最後の作品となった明治30年(1897年)の『金色夜叉』には、金持ちの子爵の住まいが登場します。

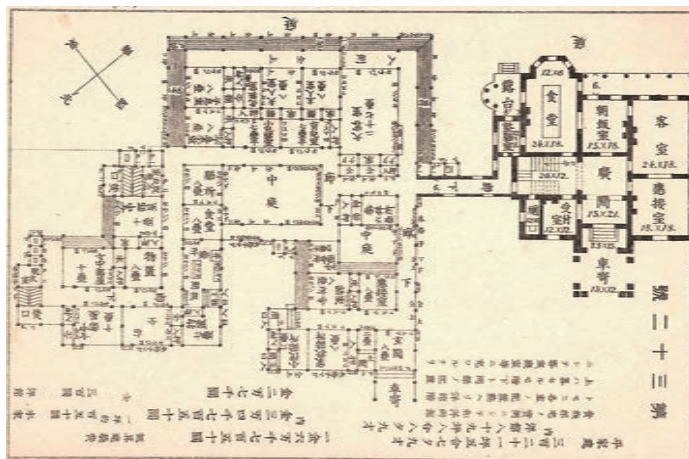
「氷川なる邸内には、唐破風造の昔を模せる館と相並びて、帰朝後起せし三層の煉瓦造の異しきまで目慣れぬ式なるは、この殿の数寄にて、独逸に名ある古城の面影を偲びて此に象れるなりとぞ。」尾崎紅葉『金色夜叉(上)』(岩波文庫、2003年、129ページ)

「唐破風造」と「三層の煉瓦造」が、それぞれ和館と洋館を指しています。明治30年代には新聞紙上の連載小説にも描写されるほど、この形式は普及していたことが分かります。そして、この頃になると、中流層の住まいにも小和館の玄関脇に応接室として“洋室”を備えたものが出現することになります。このように洋風の生活は、最初、接客の場を通して伝統的住まいにも採り入れられ始めていたのです。

むすびにかえて

明治期に始まる住まいの変化は、いち早く導入された洋装化への対応から始まったように思います。和服から洋服への変化は、同時にユカ座からイス座への変化を求めたのです。衣の分野で住宅(内)と社会(外)で和服と洋服を併存させ使い分けたように、住まいでも同じ方法が採られたといえます。伝統的な和館の横に独立した洋館を建て、それを廊下で連結して和と洋の生活の場として併存させたのです。伝統的生活と新生活を混在させることなく、併存させるという方法は、異文化を採り入れる際の賢い方法だったように思います。そして、その異文化に慣れ始めてから、徐々に伝統文化との融合化が図られていったようにも思われるのです。いずれにせよ、併存という方法は、見方を変えれば、ある種豊かさを示すものでもあり、明治の人々の知恵ともいえるかもしれません。

図 和洋館並列型住宅の平面図



出典: 越本長三郎『和洋住宅間取実例図集』(建築書院、1907年、32ページ)